

【第1回大会】



日本VR学会第1回大会

大会を終えて

廣瀬通孝

大会長
(東京大学)

第1回VR学会大会が10月8、9日の両日にわたって開催され、盛況のうちにその幕を閉じた。初日は小雨模様であり、参加者の出足が心配されたが、10時開始時点では約250名が国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場に集まり、立花隆氏の特別講演の開始を待った。最終的な参加人数は全部で380名に達し、第一回目としては、ますますのスタートを切ったと言えるのではないだろうか。

本大会は、いろいろな意味においてユニークだったという意見を各所で耳にする。論文発表では、専門技術的な話題が論理的に展開する一方で、芸術展示があり、アーティストが参加者の感性に訴える。そしてさらに製品展示が現実的システムのデモンストレーションを行ない、VR産業のテイクオフを感じさせる。これらはお互いに、それぞれの個性を主張しつつ、しかしVRという軸のもとで巧妙に融合していたと思う。小生も何か新しい学会のスタイルを見たような気がする。これが手前味噌でないことは、先述の通りであり、参加者の皆様も賛成してくれるものと思う。

実行委員の平均年齢が若かったことも特徴的なことと思う。比較的経験の少ない委員の皆様が、しかし一生懸命に手づくりの大会運営をしてくれたと思う。大会終了後の実行委員会での委員諸兄の笑顔は最高であった。委員長として、ずいぶん無理なお願いもしたことと記憶しているが、だれもがいやな顔ひとつせずご協力いただいた。心からありがとうを申し上げたい。

特記すべきことは、各界からの心あたたまご支援の数々である。大会のポスター、大会論文集、懇親会など

申し訳ないほどの予算で実現することができた。特に展示にあたっての産業界からの金銭的援助は、大会運営に大きな安定感を与えてくれた。会場のオリンピック記念青少年総合センターも、国立施設としては考えられないほどの便宜を図っていただいた。関係各位に改めてお礼を申し上げます。

そして何といてもこの大会を成功にみちびいたのは、会員諸氏のご支援である。今後とも学会全体が、この熱意を持ち続けることができればと期待する。ともあれ、皆様、本当にお疲れ様でした。

(News Letter No. 6より転載)

大会後記

小木哲朗

総務担当
(東京大学)

日本バーチャルリアリティ学会第1回大会の幹事および事務局を努めさせて頂きました。慣れない仕事のため不手際も多く、たくさんの方々に御迷惑をおかけしましたが、無事に大会を終えることができてほっとしているところです。今回何といても一番の心配事だったのは、第1回目の大会ということでどれだけの人が参加してくれるか全く見当がつかなかったことです。そのため、実行委員を始めとしていろいろな方々の人脈をお借りして広報活動を行ったわけですが、1000枚作成したポスターが各大学や企業の掲示板に貼られるまでには、非常にたくさんの方々の手を経由したと思います。

その成果もあり、大会の1週間前ともなると問合せ等が急増してきて、私の部屋では電話とFAX、おまけに電子メール受信のピー音が同時に鳴っているなどという状況が頻繁になり、悲鳴を上げると同時に大会への関心が集まってきたことに安心したりもしました。結局、ふたを